

浄土

monthly JODO

2015
September

9



楓

南 初枝 の作品

陶芸家

カエデにはいろいろな漢字が当てはめられる。槭、槭樹、楓。モミジ（紅葉、栂）とも呼ばれるが、その場合は色葉、照葉、谷紅葉、柿紅葉、桜紅葉など様々な樹木の紅葉の総称でもある。主に童謡などで愛でられるものはそれで、赤・黄・緑など様々な色合いを持つ為、野山の錦などと表現される。

楓の小皿と碗。仲秋の気分の出た作品である。

撮影・芝崎慶三

埼玉・川越

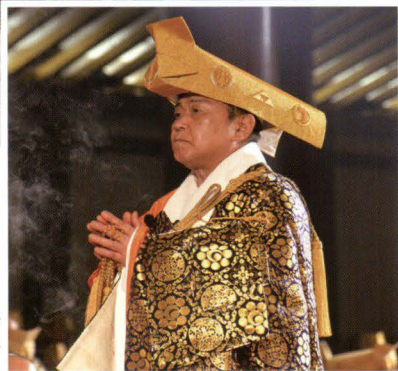
蓮馨寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



吞龍上人を祀る吞龍堂。蓮馨寺の顔となる御堂だ。



今年4月5日、大本山増上寺での御忌唱導師を務められた蓮馨寺桑原恒久住職。



平成27年4月5日、増上寺大
殿本尊阿弥陀如来御前にて
扨子を振る桑原住職。御忌
の唱導師を務められた。



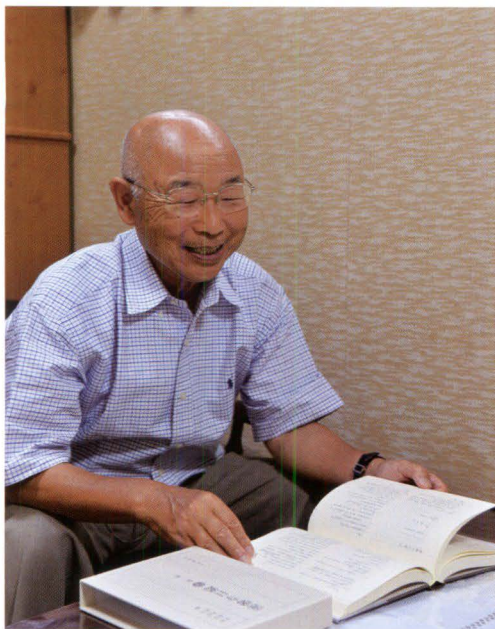
祝宴では桑原住職の恩師となる増上寺御法主
八木季生台下、善導寺御法主阿川文生台下、
鎌倉光明寺御法主柴田哲彦台下からの心あた
たまる祝辞が続いた。



唱導師の委嘱状。1月25日の
伝達式で八木台下より贈る。



御忌では本尊阿弥陀如来像の前に法然上人の像が安置される。
表白を読みあげる桑原住職。



「蓮馨寺日鑑」の編者に桑原住職とともに名を連ねる宇高良哲大正大学名誉教授。埼玉・上尾のご自坊十連寺にて。

現在第二巻までが発行されている。
全部で十巻となる予定だ。



『蓮馨寺日鑑』埼玉県教育委員会から有形文化財の指定を受けている。

浄土

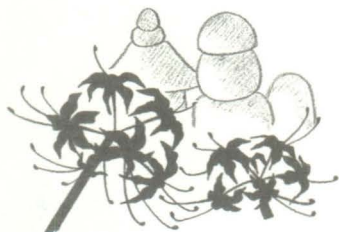
2015/9月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 埼玉 川越 蓮馨寺	写真＝真山剛	1
連載 法然上人のお言葉⑮	梶村 昇 英訳 河西良治	6
アーカイヴ 浄土誌上ライブラリー いま平和への祈りを	成田有恒 佐藤賢順 鵜飼隆玄	8
寺院紀行 埼玉 川越 蓮馨寺	真山 剛	18
連載 会いたい人 春風亭小朝さん③	関 容子	26
連載 響流十方	林田康順	34
連載 東日本大震災の被災地を訪れて⑤	成田淳教	38
連載小説 渡辺海旭⑥①	前田和男	42
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子	48
連載 マンガ さっちゃんねッ	かまちよしろう	51
編集後記		52

表紙・陶芸家 南初枝の作品

表紙裏＝表紙の言葉

裏表紙裏＝仏教歳時記



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

ご法語

問うて曰く。念仏のほかの余善よぜんをば、往生の業にあらざるとて、修しゅすべからずという事あり。これはしかるべしや。

答えて曰く。たとえば人の道をゆくに、主人一人につきて、おおくの眷属のゆくがごとし。往生の業の中に念仏は主人なり。余の善は眷属なり。しかりといいて余善をきらうまではあるべからず。

(十二箇条の問答)

現代語訳―尋ねて言うには、念仏以外のいろいろな善行は、極楽へ往くための行ではないので、行じてはならないということがありますが、そういうことでしょうか。

答えて言うには、たとえば人が道をゆくのに、主人一人に多くの一族郎党がついていくようなものである。極楽に往くには念仏が主人であり、他の善は一

法然上人のお言葉

Honen Shonin's Sayings

One asked, "It is said that you must not do any good deeds but the nembutsu because they are not deeds necessary for going to the Paradise. Is it true?"

Honen answered, "It can be compared to a scene in which a master is followed by a large number of his family and followers in his journey. In a journey to the Paradise, the nembutsu is the master and the other good deeds are his family and followers, but, even so, that is no reason to dislike these other deeds." (*Twelve Clauses of Questions and Answers*)

族郎党である。だからと言って、他の善を嫌うということはあつてはならない。
解説

昔「主義者」という言葉がありました。言葉そのものの意味は、ある特定の主義を持った人ということですが、実際は当時の共產主義者や無政府主義者などのことを言いました。彼らがあまりにも一つのイデオロギーに執着し、それによつてすべてを解決していこうと頑なに主張していたからです。この世は、いろいろなものが輻輳し、それらが一起一伏しながら動いていくものだと思います。それを一つのイデオロギーで、すべてを解決しようというのは無理というものです。

人間は観念に弱く、何か一つのことが決まると、それでなければならぬように言います。ここでの質問もそれに類したものでしょう。この世は、人間の思議を超えた大きな力で動いているのであつて、浅はかな智慧で解明し尽くせるようなものではありません。とすればそれに随順して生きていくほかないのではないのでしょうか。いろいろな善行も、一切その随順の道に振り向けて、この今を生きしていくことだと思います。法然上人はそう答えられたのだと思います。

Commentary

There was once the word *shugisha* in Japanese, which corresponds to the English word *ideologist*. The word itself means a person who has specially fixed principles. It actually referred to communists or anarchists of those days, because they overly attached themselves to their own ideologies and obstinately claimed that they could manage to solve all problems solely on their principles. We can say, however, that this world is overcrowded with a variety of things and is constantly changing according to how one thing or another happens. Thus it is unreasonable to attempt to solve all problems depending on just one ideology.

Humans are weak in ideas, so that once they decide on one idea, they cannot help sticking to the idea. The same may be true with the question in the above quotation. The great power moves this world but no superficial human wisdom can make it completely clear. This being the case, what else can we do but live with our devotion and obedience to the power? We can say that we should live here now by diverting to such an obedient way of living whatever good deeds we might do. I think that Honen answered the question in that way.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

アーカイヴ 特集

いま平和への祈りを

浄土誌上ライブラリー

1950(昭和25)年6月号

成田有恒

1952(昭和27)年11月号

佐藤賢順

1971(昭和46)年8月号

鵜飼隆玄

—西遊記私考—

孫悟空と 平和主義

成田有恒

西遊記は周知の如く三蔵法師、孫悟空ら同行四人（—正確に云えば一人三匹—）の膝栗毛である。天竺へ大乘經典を取りにゆく難路嶮行の旅物語である。作者と伝えられる明朝の呉承恩は、構成メンバーのそれぞれを、きわめて象徴的に描き分けている。

孫悟空は野性的な性格の持主である。妙術や、猿智恵とは凡そかけ離れた逞しい才智を駆使して縦横に暴れ廻る。旅路のゆくてを、さえぎる数々の妖怪変化と勇敢に戦い、文字通り快刀乱麻になぎ倒してゆく。金角銀角との攻防、牛魔王退治の章などは圧巻と云うべきであろう。西遊記が、いわゆる単純なピカレスク風の冒険譚だけであつたとしたならば悟空こそはその立役者であるに違いない。

猪悟能八戒は猪（豚？）の^{へんげ}変化で、一通りの妙術を心得ているとは云うものの、きわめて間拔けな、まるで悟空の強さを引きたたせるためにあるような悲しい存在である。八戒なる名前が皮肉と思われるほどに、五慾具足の凡愚ぶりを随時随処で發揮する。ひもじいと云っては妖怪のワナである餌に手を伸ばし女人国に至れば舌舐めずりをしながら漁色の構えを見せる始末。化物の風上におけないような道化者だ。だから数限りなく失敗をくり返し、師僧や友を危地におとし入れ、あわやと云う処で悟空に救い出されるのが落ちである。小心者の癖に、ギラついた欲望を抑制し得ない猪八戒の像に、現実の我々の一面が写っているとは云えないであろうか。

沙門悟浄は水棲動物の変化であるが、その化物たる機能は八戒以上に微弱である。居ても居なくても良いような存在。八戒ほどに露骨に欲望の角を出さないが、さりとて彼の善意も曖昧だ。盲目な、何か大衆の、市民の善意を偲ばせる存在である。沙悟浄の隸属的な姿勢は、案外^{けん}絢ら^んたる悟空や八戒に乏しい善さと真実さを語っているとも云える。

だが是らの三者は所詮は脇役。主人公はやはり三蔵法師だと私は見る。私が西遊記に魅力を感じている心の角度は、つまり三蔵なる人物への傾斜を意味することになるのだ。

三蔵は一見西遊記では如何なる役割をも果していないかの如くに思われる。悟空たちに守られて、危い瀬を渡りつつ旅を続ける非力なる師匠でしかないように見える。無論幻術を心得ている訳でもなく、女人国への渡河に際して、その水を呑み、八戒もろともに妊娠してしまうような凡夫の機能しかない人間なのである。妖怪変化に遭遇すれば闘争の一切を悟空に委任しなければならぬ。非力である——それ以上に三蔵にはどこか暗い、悲劇的な影がたえず付きまともいる。

それは三蔵の出生からなのであるのでもあろうか。未だ母の胎内にある頃、両親が故郷

の旅からの帰途、賊に遇い、父は惨殺され、母は胎内の遺児を思つて奸賊の凌辱に耐え、月満ちて生れた三蔵を板にのせて流し、三蔵が長じて、この母と邂逅した時、名乗りあつて後に自らの生命を断つた——この母の宿命がこびりついているせいであるかも知れない。それはともかく、然しこの暗さは復讐とか猜疑さいぎに充ちた暗さではない。その弱さはすべてを諦めた虚妄の果てと云うのでもない。暗さにはたえず一筋の光りが流れている。同時に非力な肉体の底流になつて強いある種の信念が筋通っている。それは絶対的な平和主義である。

三蔵は幾度か、悟空の猛勇によつて救われる。然しその都度三蔵は妖怪変化を殺したと云う理由で、この恩人とも云うべき愛弟子を非難叱責するのである。時には破門さえい渡している。悟空はぷりぷり怒つて「一人でゆけるものなら、いつてみるよ！」とうそぶく。更に「自分が殺されるかどうかの瀬戸際にまで、殺生戒を守れなんて、そんなベラボーな話があるかい」と尻をまくり、正当防衛論を前面に押し出してせせら笑うのである。

まさしく悟空の言葉通り、妖怪変化との戦いは命を賭けた激しい勝負の世界である。負ければみんな化物の餌食になる。餌食になれば大乘經典もヘチマもない。人類の幸福のために經典を取りにゆくのだ、途次で化物の餌食になつてはならない、降魔の利剣を振つて摺伏すりふくさせるのは当り前なことだ……名分はかくの如く歴然としている。悟空の正当防衛論には筋道が通っている。非力な三蔵が悟空の妙術に救われながら、而も絶対平和を唱え、手段としての悟空の暴力をたしなめるのはジレンマとは云えないが、然し生命の危機の渦中で、隠れ場もない動乱の巷で、身に寸鉄をも帯びない丸腰で主張する平和主義は、裏付けもなく論拠も薄弱のように見えて、実は一番真実の線に添っているのではあるまいか。

私は思い出す。源平角逐かくそくの末路に、念仏一行を高唱した宗祖の精神の像をである。更に

は郷土の同族の滅亡を眼の辺りに眺めつつもそれへ一指をも触れず、心を惑わさず一筋に真理の道を見つめていた釈迦如来のたたずまいを思い出すのである。

妖怪変化が自己にとつて如何に危険な掠奪者であるかを熟知しているながらも、彼らから身を守るためとは云え、振舞われた暴力を否定せずにはおられない三蔵の心の支点が、私にはよく判るような気がする。そしてその三蔵法師に近い環境におかれた現実の自分たちを顧る時、共感の深度は一層深い処へまで届いてゆくような気がするのである。

仏教が高唱する絶対平和主義は一見消極的だ。日和見的にさえ見える。いばしん猿意識の激しい渦に立ち向う時、機能に余った、閑雅なる理想主義のようにさえ思われる。人間の原罪意識を標榜し、唯一神の創造主の前に懺悔せる身を投げ出す、かの西の国の教えは花々しい。近代的な、ある意味での詩情をかき立てる方向へ人間を誘う魅力をはらんでいる。それはそれとして、地味な非力な平和主義が人間の奥底深くに根ざしていることを、私はやはり気づかずにはおれないのである。

話は逸脱してきたが、正当防衛論を唱えて居直った悟空が、結局の処、その都度師僧三蔵のもとへ舞い来り、前非を悔いて許しを請う姿はどう考えたら良いのだろう。変化自在な、神通力を習熟した三匹の化物たちが、非力な三蔵を慕って旅を続けるさまは何ものかを暗示してはいないであろうか。

西遊記の面白さはこの三蔵法師によって表現された絶対平和主義だ——と私は終始を割り切る所存はないが、現実にある平和主義が殆んど何らかの権力を背景にし、力による見通しのもとに主張されているのを見るにつけ、ふとこんな角度から西遊記の読後感を考えて見たのである。そして盲目な、更に一層非力なる大衆が求める平和への欲求の図を、隣国の古い奇書の中に見たまでのことである。

世界の平和は
佛教によらざれば
期待しがたし
伊藤述史世界佛教徒会
議長は語る

佐藤賢順

である。

戦争中上映された上海電影公司の製作になる漫画「西遊記」のラストシーンが未だに私の脳裏には鮮明に焼きついている。難路の山坂を越え、遙かに天竺の都を遠望した同行の四人の姿である。馬上から小手をかざして大乘經典が藏される仏都を無表情で見つめる三藏法師、欣喜雀躍して金篋棒を振りながら先走って駆ける悟空の小さな姿……新しい大乘經典がある仏国へ私たちは、いつ到達することが出来るのであろうか。

真の世界の平和は佛教によるより以外に望むことができない、などというのと、極めてお座なりのことをいっているように聞えるけれども、これは単なる式辞やメッセージの文句ではない。九月二十五日から一週間、東京築地本願寺で開かれた第二回世界佛教徒會議は、いろいろの点で收穫の多かった国際會議であって、代表個人同志が胸襟を開いて語りあっただけでも大変に意義の深い催しで、世界の特に東南アジアの佛教徒の親和を深め、結束を固くした効果は相当なものであった。これが今後の世界平和に寄与するところも、また貿易上に便宜を与えることも大きいであらうし、その意味で、この會議は十分な成功であったと思われる。しかし私がいま冒頭に出した命題は、會議と直接関係ある報告ではなくて、むしろ思わぬところで出会った仏教の真の知己についての報告

である。會議の終った三十日の夕方から後樂園で代表歡迎国民大会が行われたあと、八時から上野精養軒で歡迎晚餐会が催された。出席者三百人にも及ぶ戦後最大の国際饗宴であるということであった。晚餐会の始まるまでの暫くを、隣りのサロンで休んでいるとき、私はたまたま伊藤述史博士と隣り合せた椅子に坐った。無論、博士とは個人的な面識はなかった。

今度の会議で、伊藤氏が総会の議長の一入として幾度か議長席に着き、各国代表からの様々の提案や発言を、手際よく処理されて、日本語と英語と両方で巧妙に議事を進めてゆかれる手腕には感服していた。しかしジュネーヴの国際連盟事務局に二十何年も活躍せられ、戦時中は情報局総裁を勤めておられた氏が、どういう因縁で世界佛教徒会議の議長を勤められたのかについては、私は全く知らなかったし、会議出席者の大部分が知りたがっていたことであつた。

「先生はどういう因縁で仏教におはいりになりましたか」と尋ねた。

「私が仏教に入りましたのは妙な事からなのです。政治の方面からです。あなた方は信仰や研究の方面から仏教におはいりになったのでしょうか、私のは政治からですよ」

そこで私は政治家の考えがちな、仏教を利用してアジアを統一して、ヨーロッパに対抗しようという意味かと思つて、尋ねてみた。「いや」と博士は強く否定して、「仏教によらなければ、いつまでたつても戦争はなくならない。世界のほとんどの平和は仏教によるより以外に実現する道がない、という結論に達したのです。」と言われて、この結論に達するまでの道筋を話された。

「私はまだ仏教の信仰を持っているというところまでいきませんが、度々、宇井（伯壽）さんなどと研究会を開いて研究しています。私は三十年近くもヨーロッパに居て、西洋文化というものについては、裏の裏まで知りつくしているのです。そして長い間の見聞から言いますと、この西洋文化が付き纏う限り世界に戦争は絶えないと考えるのです。」

実に意外な言葉であつた。（実は当然の言葉というべきであらうが……）私のことを世間ではクリスチャンだと思つています、長い間あちらにいましたから、と言われる位、西洋文化の中に生活された人からの言葉としてはむしろ意外であつた。一口に言つて我の思

想、有^あの思想に出発する西洋文化が、この我の充実と拡大を目指して、嫉視^{しつし}と反目^{はんもく}と鬭争を続けているのは当然である。

「その結果、西洋文化に頼^{たの}っているのは戦争は防止できないと考えるようになりました。東洋には幸い仏教といういいものがある。仏教の深い教理については、私はまだよく知りませんが、私の三年間の追放生活中に多少、研究して知り得たところによりますと、仏教の中心思想は、因縁所生ということでありましょう。この考えを西洋にも理解させるように充分に話してやったら、世界平和の実現に一歩ずつ近づいてゆくと思います。仏教の思想は難しいが、これを西洋人にも解る言葉で説いてやるのがこれから必要なのです。」

因縁所生とは縁起である。全世界のもの一つとして因縁によって出来ていないものはない。すべては相依り相助けて存在しているもので、ただ独り孤立してその存在性を持つているものはない。無我である。であるから我を拡げるための貪りを捨て、反目や鬭争を止めて、互に助け合わなければならない——博士の、因縁所生ということか西洋人にもよく理解させるという言葉には、そういう意味が含まれていることはいうまでもない。

「さき頃、東南アジアを一巡して、あちらの連中とも話し合ってきました。仏教によって世界平和のために貢献しようということをです。パキスタン、インドネシア、ビルマ、タイなどどこも宗教的情熱の強い所です。パキスタンやインドネシアでは回教徒とも十分話し合ってきました。パキスタンのイクバルとかインドネシアのサリムとか、回教の指導者にも偉い人物がいて、いろいろ論じ合った結果お互いに提携する見通しがつきました。この所信を広く徹底させるために、私は十一月から全国を遊説して歩くつもりです」博士の信念と実行とを知って、深い感動を受ける者は私ばかりではあるまい。

終戦後アジアの諸国が独立して、今まで植民地として押えられていたアジア諸国の東洋

平和に還える 唯一つの道標

鵜飼隆玄

的な特色ある考え方が、政治においても外交においても次第にはつきり世界の表面に表れてきた。インドのパール判事の日本無罪論にしても、昨年の講和会議で行ったセイロン代表ジャヤワルデネ氏の演説にしても、駐日印度大使チェトゥール氏が時々述べる意見にしても、一般の政治家や外交官とは違ったケタはずれの識見である。これからは一層こういう東洋本来の思想がはつきり現れるであろうし、現わさなくてはならない。

それにしてもわが国の政治家は今度の国際会議にどれだけのことをしただろうか。朝日新聞が「世界佛教徒会議の反省」として、三段抜きでトップ記事にして取り上げたように、開会式には日本の大臣は一人も出席しなかった。三笠宮が開会式から屋上午餐会まで出席して下さったのに。閉会式には仏教信者の木村法相がただ一人出席した。いかに総選挙の直前とはいえ、政治家というものは恐しいものであるという感じがした。

七月十五日は盂蘭盆会として日本でも千年以上の歴史がありますが、明治維新後の改暦で新旧両用の暦となった為に地域的に八月十五日に行なわれるお盆が多くなったのであります。

七〇年代の変革が常識的理解とされて文字通りの無常迅速で変化が続発しています今日、反体制的な変革目標を感情的に否定することはありませんが、激しい変移には応じ切れない多数の人々は挙措(きょそ)を失い、唯徒らに利己的防衛に腐心して、他を顧りみない馬車馬的行動をくり返して、対立と混乱の渦中に沈んで朝に源氏を迎え、夕に平家を送る主体性のない生活が現代の実態であると思うのであります。

主体性を欠き断絶、人間喪失といわれる様に、共同社会の一員としての連帯

観すら失った私達の実体を凝視する時、果たしてこれだよいかと反問せずにはいられないと思います。然し断絶現象は昭和の異変ではなく、人類に年齢、教養、経済力等の相異のある限り、いつの時代にも断絶があつた事は歴史が証明していますが、断絶が人間喪失に連鎖反応した事は稀れではなかつたかと思ひます。

一面断絶現象の存在は人類進歩の過程に於ける必然的事象ではあつたが、それを埋めて尚温かい人間関係を保ち得たのは、人々の生きた信仰心の賜であつたといえるのです。

このような見解で歴史を繙いて今日とを比較する時、如何に人間に信仰の必要なるかは、誰しも認めることができると思ひます。

憶えば今日程人間性を無視した唯物的思考に支配された時代は、過去になかつたと考えます。

信仰の否定、無宗教が現代人の誇りであるが如き誤りが実存しても、国民感情として未だ伝統的お盆行事が活きているので、その機会に自から欠けるものを質^チね、それを補つて、再び人間性豊かな幸せを蘇えらすべきだと思ひます。幸い仏縁深い行事は、信仰の有無に関係なく各地で各種の行事として行なわれ、抵抗なく関与する機会に恵まれていますので、その一行事を起点として人間性復活への道として、信仰心の発芽ができるのではないかと思ひます。

成る程、科学の進歩が自然征服の力ありとする錯覚を基盤とした論理と推理が、自然と人間の本質的関連をも誤らしめていゝといえるのではないか考えられます。

随つて本能的な欲求として、唯物的計算に基づく基本人権思想と、その乱用が人間性の問題や生活体系の狂いを招いている事は自明であるが、敢えていへば、これは人間の幸せの道ではない事が余りにも明瞭であります。

世界的に経済大国と認められた日本では、科学が発達して一年中、菊花が店頭に咲き食膳に胡瓜が供せられていても、やはり涼秋の菊花の香りは人の心を執_もえ、真夏の胡瓜には温床胡瓜にないそれらしい味を持っています。

この一事に鑑みても宇宙自然の恵みなくして人間の真の幸せは存在しないと思えます。

法然上人の御言葉の中に、

例え一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして 云々（一枚起請文）とあります。

現実に大自然の力に直面している科学する人々が、謙虚にこの言葉を味って頂く時、自から仏智仏力の偉大さと人間力の過小さが理解でき、自力依存から仏力即ち他力への信頼感が湧いてくると信じます。

人智の極限力ともいえる人工衛星が月に着陸しても火星に飛ばうが、悠久の自然は千古不変ではありませんか。

人智、科学による豊かさには恐るべき公害を伴い、自然征服の前に人類自滅の穴が掘られているではありませんか。

人間は自然の恵みと力を無視した空も緑もない文化生活では、幸せは発見できません。一枚起請文の御言葉を噛みしめれば、他力の導き、生かされる喜びに合掌念仏する心が開けるものと信じます。他力のお念仏こそ対立、混乱、断絶のない生活に還る唯一つの道標になると信じます。

寺院紀行

埼玉・川越

蓮馨寺

文・撮影／真山剛



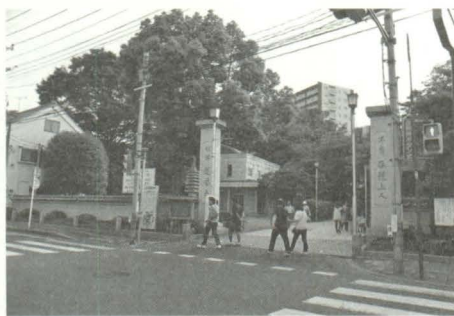
吞龍上人を祀る吞龍堂の内陣。三百六十五日、吞龍さまへのお参りは絶えることはない。

日本全国の観光地に外国人観光客が溢れ返っている。テレビ画面だけでなく実際に街中で頻繁に外国人を見かけるし、外国人客で満員のラーメン屋もある。また、株式市場の活況も中国人の爆買いのおかげと言われている。円安効果に五年後の東京オリンピック、今や日本は世界からの旅行者を「おもてなし」する観光大国日本に向かっていくが、今回訪れた寺院と住職はまさにこの「観光」に深く関わる寺院であり、住職である。

「昨年の川越の観光客数は657万人で過去最高です。この一年で外国人観光客が70%増ですから、街並みの案内看板やインフォメーションもどんどん変えていきます」とは、約600の団体・個人からなる社団法人小江戸川越観光協会の糸原恒久会長。

「時薰るまち川越」を観光キャッチフレーズにするこの小江戸川越観光協会は今年で創立五十六年目を迎える歴史ある団体で、糸原会長は四代目で現在二期目を迎えている。また、先代を継ぎ、二十一年にわたって務めているのが川越華道連盟・茶友会の会長、そしてさらに県の監事・NPO法人武蔵観研名誉顧問と糸原会長は川越の観光に深く携わっている。

もちろん、本来の僧侶としての肩書きも少くない。浄土宗議会議員、埼玉県佛教会常務理事、大正大学講師、大正大学同窓会埼玉副支部長、そして埼玉県教誨師会常任理事。また、母校慶應大学の



蓮馨寺の山門は川越のメインストリートに面している。左右の寺号塔には、檀林と吞龍上人の文字が彫られている。

埼玉合同三田会会長も務めている。本業の住職、つまり蓮馨寺代表役員の肩書を入れるとちょうど両手、十もの肩書きとなる。

関東十八檀林という浄土宗の名刹で、かつ川越のメインストリートに面する孤峰山宝池院蓮馨寺だが、住職のこの肩書きの多さは一休、何を物語るのだろう。

桑原住職は二人の姉に続いて、昭和二十四年にこの蓮馨寺に生まれた。大学教授も勤めた実直な先代住職の後継者となることに抵抗はなかったが、由緒ある大きな寺の跡継ぎということは語らずに学生生活を過ごしたという。慶應大学法学部を卒業してから大正大学大学院博士課程も卒業する。その後、東京芝公園の明照会館にあった浄土宗教学院の事務局に籍を置き、自坊の法務を担いつつ二十五年間勤務。浄土宗総合研究所創設時の研究員、全日本仏教会国際文化部長の要職も歴任し、その間に、浄土宗の教学や宗学を研究し、後に総大本山の門主や法主になられる大学院時代の恩師たちと交流を深めた。週末には北関東では有名な吞龍上人を祀る自坊の吞龍堂受付に座る。三か所の山門がある蓮馨寺は参拝者や観光客そして地元の人たちが行き交い、自然と一般の市井の人たちとの会話や交流の場が多くなる寺だ。特に参拝者の悩みや宗教上の相談を受ける。新興宗教の勧誘やいやがらせへの対応にも協力、論戦を張った事も少なくなかったという。

御忌に随喜された僧侶は約二百七十人。増上寺の広い内陣が一杯となった。



こうした環境から、二十代から四十代の糸原住職は浄土宗の諸先生から伝授される念仏の教えを普段触れ合う人々にどう伝えるか、悩む人々を念仏の教えでどう救えるのか、を真剣に模索する日々を過ごしていた。

「信仰相談や悩み事を聞き続ける中で気付かされることが多々あります。中でも情念が絡み合った物事はそう簡単に解決は出来ませんが、その人が心の拠り所や心の持ち方を変えれば何とか道は開ける。そしてその心の拠り所は何といっても阿弥陀様や宗祖の教えだということです」

大学院での修士論文、「法然上人の本願観」の根底にある理念は「法然上人の念仏は極楽往生を目指すものだが、同時にその念仏が今この世に生きる人々の幸せをも実現する方向性をもつ」という考え方だ。言われてみれば、これこそ宗教の在り方の本質に思える。「教学院時代に交流させていただいた先生方、つまり法然上人の教えを受け継がれる念仏者諸師ですが、その方々に共通するのは人間的魅力にあふれていることです。ある時、吞龍堂に参拝された方と話していたら、鎌倉光明寺の法主になられた、ある先生の話になった。その方は、長くそのお寺の檀家さんで、ご住職にいつもとても明るく励まされたとのこと。私はその先生に大学院時代に教わっていましたが、学問に対しては厳格そのものの先生でした。



御忌直前の様子。お付きの僧侶も大学の先輩と同じ教区の僧侶が務めてくれた。

また、これも若い頃ですが、ある先生の寺の夏季道場にお手伝いに行くと、教学院の会合などでは厳しく論じるその先生が、子供たちと和やかに過ごしている。そして「念仏を称えると元気で良い子になれるぞ」と子供たちと一緒に大きな声で念仏を称えている。この姿も印象的でした。

他の先生方もしかりで、『そうか、心の方向を浄土に見定め念仏生活を送る中に、阿弥陀仏の導きと光明の功德が、こうした諸師の人格の中に自然と表れ出て来るのではないか』と思えるようになったのです」

衆原住職の声にさらに力が入る。

「もちろん、出家してなおかつ学門の道を極めた方々と、一般の悩み多き人々が同じ心境に到達するとは思いませんが、法然上人の念仏は、この世のありとあらゆる人々を救うための念仏で、具体的には、『選択集』第十五章段にもあるように、日々の生活の上に多大なる摂益をもたらすものだと思います。ですから、色々な縁を大切に、地元の方や一般の方々と触れ合える役職へのお誘いを受け入れ、その立場を通じて、少しでもお念仏の教えを社会に広められたらと考え、行動しているつもりです」

なるほど、衆原住職の立ち位置が見えた。

さて、その衆原住職が今年四月、大本山増上寺で法然上人の年忌



唱導師成満の記念写真。三人の台下、宗務総長も一緒に。

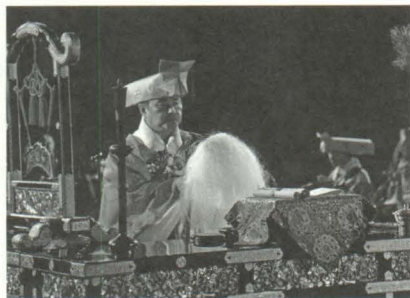
法要である御忌の唱導師を務められた、読経する僧侶がなんと270人で、参拝者も800人。雨模様で大門からの行列はできなかったが、広い増上寺大殿の内陣に座りきれず、外陣に用意された椅子に座る僧侶もいた。

「唱導師を拝命したことで、多くの僧侶の方々に声を掛けたところ、思った以上に多くの方々の随喜（喜んで参列すること）をいただきました。その上、昔からの仲間も駆けつけてくれましたから、本当に嬉しく有難い御忌法要になりました」

幸にも法儀の世話役の僧侶が大学時代の一年先輩と同じ埼玉教区の後輩だったという。その上、糸原住職は一昨年の増上寺の御忌で唱導師の脇に控える脇導師を、昨年には鎌倉光明寺でも同じく御忌の脇導師を務められたという、それだけに本番でも慌てることなく、住職曰く、「泰然自若に振る舞えた」のである。

「十遍の念仏を阿弥陀仏と法然上人像の御前で称えた時、浄土宗の列祖上人方の心に触れたような気がしました」と言うのもそうした余裕があればこそだ。

法要後は、隣の東京プリンスホテルで祝宴が開かれると聞き、顔を出させていだいた。随喜いだいた僧侶はもちろん、蓮馨寺の檀信徒さんや、川越の観光協会や商店街など地元の関係者、そして増上寺のご僧侶方も招待され、500人とい大きな祝宴だった。



務めている途中、思ったより緊張しなかったという糸原住職。

会場入り口では、糸原住職が会長をしている川越華道連盟・茶友会のメンバーが立礼でお茶を振る舞い、同じく川越の市長や糸原住職が役を務める「粹川会」という文化団体所属で、社中全員が東京芸大出のグループによる日本舞踊と弦楽四重奏、そして地元雀会のお囃子が披露された。江戸文化を今に伝える小江戸川越の観光協会会長として、精一杯のおもてなしで皆さんをお迎えしたのである。

そしてさらに祝宴を盛り上げたのが、大本山である増上寺、鎌倉光明寺、そして福岡久留米の善導寺の三人の法主台下にご臨席いただいたことだ。八木季生台下、柴田哲彦台下、阿川文生台下の三台下が挨拶の中で糸原住職の様々な業績を賛えた。特に阿川台下は糸原住職の学生時代からの恩師であり、九州からでも喜んでお越し頂いたことで感激もひとしおだった。

話は変わるが、その先代住職の頃から埼玉県が県の文化財に指定したいと蓮馨寺に申し入れていた蓮馨寺所蔵の古文書が、昨年八月によりやく発行された。糸原恒久・宇高良哲編『蓮馨寺日鑑』である。糸原住職と並ぶ宇高良哲先生は同じ埼玉は上尾の十連寺住職で、江戸時代の浄土宗史研究の第一人者。関東十八檀林はまさに専門分野である。「今回の発行も宇高先生なくてはまだ上梓されていなかったかもしれない」とは、糸原住職の謝辞である。

「古文書にも色々ありますが、日鑑とは寺の日記のことで、蓮馨寺



平成15年に改装した落ち着いた空間の応接間。21年には第二客殿も完成した。

の行事や寺内で起きた事はもちろん、江戸との交流、川越の出来事など、寺内だけでなく、川越という街の色々な事が記してある。だから、当時の川越の人の流れや経済状況、日々の生活や伝統文化を知る貴重な手掛かりになる資料なのです」

さらに宇高先生はこう付け加えられた。

「他の埼玉の檀林にも各種古文書は残っていますが、こと日鑑でいえば、蓮馨寺に一番多く残っていますね」

巻頭頁の写真が第一巻だが、全十巻近くなるかもしれないのと、この日鑑が浄土宗史に新たな視点を加えると同時に川越の歴史を紐解き、更なる観光誘致に役割を果たすかもしれない。

さて、蓮馨寺境内には昔から有名な焼だんご屋があるが、昨年鐘楼脇に太麺焼そばの店もできた。また毎月八日の吞龍さんの縁日には多くの屋台で賑わう。一般の方を対象にした写経会や經典購読会も長く続いている。まさに地元市民が集う寺であり、かつ檀林寺院という伝統を保つ蓮馨寺。いわゆる檀信徒だけに護られている菩提寺とは違い、地元への間口の広さと地域活動の拠点となる蓮馨寺ならではの特徴が、糸原住職の多くの肩書きの原点、ということなのである。

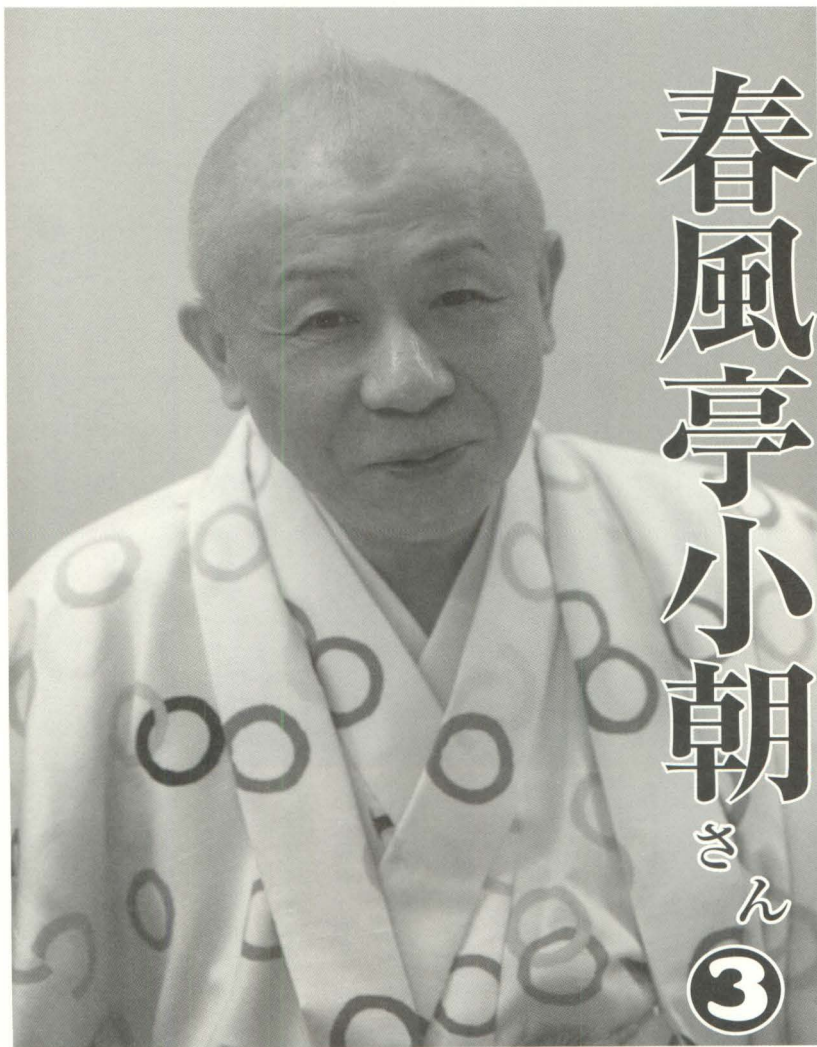
(ルポライター)



応接間の奥の竹やぶを背景に。いつものこやかな表情で。

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

小朝さんの噺家人生に最も色濃く影を落している先輩噺家と言え、やはり立川談志を置いてない。

「印象に残っていることがあるんです。志ん朝師匠の雑誌のインタビュウを読んでいたら、僕の名前が出てきて、『小朝は談志さんだろ』というコメントがあつたんです。俺より談志さんが好きなんだろ、という意味なんですけど、あ、そういう見方をしていらないのか、と思いました。」

志ん朝師匠は談志師匠をきちんと分析していらないでしたね。

談志師匠が『粗忽長屋』という噺を、ちょっと捻ったアレンジでやったとき。どうだい、俺の『主観長屋』は、って、自慢げに志ん朝師匠の顔を見た。『兄さんは普通に落語でできないだけでしょ、って言ったら、談志が黙っちゃった』という話を、志ん朝師匠が笑いながら話してらっしゃいました。志ん朝師匠のひとつことはこたえるんですよ」

小朝さんもさぞ返事に困っただろう。

談志という多才な噺家は、生来気弱で繊細な神経の持ち主であるために、やや後輩に当る志ん朝の眩い存在が何かにつけて気になつてならなかったのだろう。

「談志師匠の学校の同級生から聞いた話だと、ものすごく優しいはにかみ屋だったそうで、授業中に落語の本ばかり読んで、俺一人では小さん師匠のところへなんかとつても行けないから、一緒に行つてくれよ、って。二人一緒に噺家になろうよ、って誘われたそうです。すごくいいやつだった、って聞きましたけど、多分それが本当の談志師匠なんですよ。ね。けれどもちに『談志』として生きるために、いろいろと無理をなすってた部分があつたんでしょうね。」

僕は師匠がお元気なときのほうがよく行つてたのかな、という気がします。

相変らず訊きたいことをズバズバ訊いてましたけど、その返事があらかじめ理論武装し



1997年4月27日、歌舞伎座での「愛宕山」。勢いある高座の雰囲気伝わってくる。

であることだと雄弁な答が返ってくるんですが、そうでないことに当たるとまるで子供っぽいことしか言わないのがおかしかった。

あるとき、師匠が唯一質問から話をそらしたんです。あれ面白かった。師匠の高座の口調が急に『上から目線』に変ったときです。それまでは、一杯のお運びで有難うございます、だったのが、少々生意気というか乱暴な口調になった。なぜ短期間にそうなったんですか？　つてうかがっても、理由は言ってくれませんでした。師匠の中で何か思うところがあつたんでしょうね」

小朝さんは議員会館まで出向いて稽古をつけてもらうこともあつたという。

「何をお礼に持つて行こうかとさんざん考えて、師匠はそのころ野菜ジュースに凝つて、それもありきたりのものじゃなくてV8というのじゃないとダメ、というのをリサーチしましてね。それを秘書室に届けといたら、帰りがけにとつてもいい笑顔で喜んでください

ました」

談志とのつきあいで、小朝さんは人生の大きなことを学んだという。

「いろんなことを師匠の背中で見せていただきました。それを大きな流れで見ていくと、師匠が若いころに『ああいう噺家はいやなんだよ、昔はあんな人じゃなかったのに、年取っちゃうと人間あんなっちゃうのかなあ、やだなあ』つて、僕が前座のころによく聞いてたんで、談志師匠は年取つても決してそうならない方だと、実は思っていたんですよ。ところが自分でいやだと言っていた人にだんだんなつていったんです。年を取るつてことはそういうことなのか。それが僕の中では大きな人生勉強になりましたね。あれだけ頭のいい人が、なぜそうなっていくのか。実際に教えてもらったことと、背中で見せて教わったことと、これは大きなことでしたね」

具体的には、どんな老人像が嫌われるのか

..

「昔、有名な俳優さんが、今一番気にしてることは？」と問われて、自分の扱われ方、と答えていたのを見て、衝撃を受けたことがあるんです。もっと、ドンと構えていればいいのに、と思つたものでした。

談志師匠はよく、人は名譽かお金のとつちかでしか動かない、とおっしゃつてましたけど、晩年、見ると、自分の扱われ方に非常に敏感でした。昔だったら絶対に許さないような態度を弟子がとつても、あいつにとつてオレはその程度の存在つてことなんでしょうなアつて、時代の流れを自分に言いきかせているようなところがありましたね」

晩年、病気で声を失いながらも最後まで突つ張つていたような談志の寂しい姿が目に見えてくる。

「師匠は噺家としてとても良い人生だったと思いますね。議員にもなつたし、やりたいことはやりつくしたし。ただ、なんで俺から声

を奪うんだ、みたいなことはちよつと計算外だったかもしれないけど、それ以外は恵まれてましたよ。

しかし本当のことを言えば、本筋のところでは落語界の頂点を極めたかつた、ということはあると思ひますね。

この間、談志師匠のお嬢さんに会つたとき確かめたんですが、師匠の臨終までを描いたテレビドラマで、いよいよダメというときに、『俺の名前は立川談志』つて言つてたけど、本当にそれ言いました？ つて訊いたら、言つた、つていうんですよ。明確にはないけど、そう言つた、つて。俺は談志として生涯を生き抜いた、つてこと総ての象徴なんでしょうけど、そのためには自身がずいぶん傷ついたり、無理をしたんだろうな、と思う。

師匠は自己分析できる人なんで、意地悪なことやいやなこと言つたりしたときに、なぜそれを言つたのか、わかつてる師匠なんです。で、分析の結果、自己嫌惡に陥る。でも、そ

れわかつてても、言われないわけにいかない、つてところに、年を取ったことの悲しさを感じてたと思う。あ、だんだんまとまってききました。師匠も若いころは、そこをこらえるよ、と思つて見てたんでしょけどね、多分」

小朝さんは、晩年の談志を訪ねなくなつた。「お前に話がある、とか、ちよつと会おうよ、という手紙が来て、以前だつたらすぐ行つてたのに、会うたびにこれ僕の中の談志師匠じゃない、というのがあつて、それをまた言い訳するような師匠も見なくなつたし。今思うと、やつぱり行くべきだったなあ、と思う。どんなことであれ、そこまでつきあわなきゃいけないかと思ひます。」

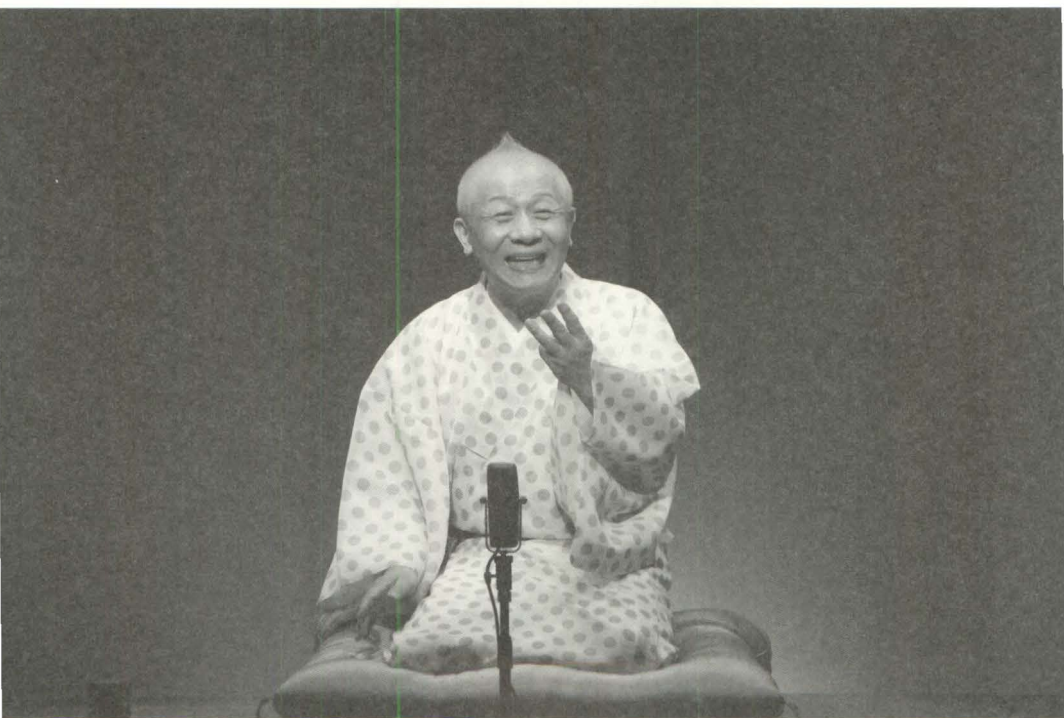
滅多にないことだけど師匠が人を褒めるとき、最高の褒め言葉は『やりやがつたな』というのでした。戒名なんかどうでもいい、という師匠でしたけど、自分で考えておいたのが『立川雲黒斎家元勝手居士』というんですけど、これ思ひついたときも、皆に『やりや

がつたな！』と言われたかつたんでしょけどね」

六十代の談志のまともで神妙な高座を、私は一度だけ聞いたことがあつた。それは志ん朝が亡くなつた二、三日後のこと。談志が急遽代演で『宿屋の富』を一席つとめたが、終始寂しげではあつたものの、最盛期を彷彿させる本筋の芸だつた。

「志ん朝師匠も晩年には悩みがあつたみたいです。いろんなことを考えると寝られない、とおつしやるんで、どんなこと考えるんです、つて訊いたら、そりや、世界平和とかな、弟子のこととか、自分の今後とかな。へえ、お弟子さんと世界平和ですか、大変ですねえ。大変だよ、お前、つて（笑）。

師匠はいつも完璧な落語をめざしていて、それが晩年、言い間違えて自分で吹いたりする、あまり見かけない光景もありました。昔のような華麗な高座がつとめられなかつたり、容姿もだんだん衰えて行く、という悩み



2014年8月25日、大阪・新歌舞伎座「春風亭小朝独演会in三座」での小朝師匠。

があつたんだと思います。

ポリーニは完璧なピアノリストで、アルバムのジャケットに吉田秀和さんの『この上何をお望みですか』という讃辞が載つてたりしましたが、やっぱりあるときから弾き方を変えたり、試行錯誤の連続だったようです。

志ん朝師匠にも同様の悩みがあつたようで、六十三歳という年齢で、いい時期に亡くなつたんだ、と言う人もいますけど、僕はそうは思いません。

ある程度の衰えを抜け出たときに、独特のフラのある人……何とも言えないおかしさのあるチャーミングな師匠でしたから、きつと楽しくて面白い別の志ん朝師匠が、もしかしたら晩年の志ん生師匠みたいになつたかもしれないなかつたと思いますね」

二人の偉大な先輩を身近に見て、分析力洞察力をフル回転させてさまざまなことを学び取つた小朝さんは、今まさに充実の時だろう。

終りに、こんな心あたたまる昔の一場面を

披露してくれた。

「志ん朝師匠の二ツ目のころのテープを聞いたんで、さっそく談志師匠に『あの師匠は二ツ目のころからうまかつたんですね』って言つたら、目を輝して『うまいよお！』って、自分の自慢のようにおっしゃって。こういうの、いいなあ、としみじみ思つたことがあります」

(この項おわり)

誰とても止まり果つべき身にも候わず。我も人もただ遅れ先立つかわり目ばかりにてこそ候え。その絶え間を思い候も、またいつまでかと定めなき上に、たとひ久しと申し候とも、夢幻、幾程かは候べきなれば、ただかまえてかまえて同じ仏の国に参りあいて、蓮の上にてこの世のいふせさをも晴るけ、ともに過去の因縁をも語り、互いに未来の化導をも助けん事こそ、かえすがえすも詮にて候べき。

（法然上人『正如房へつかはす御文』）

どんな人も、身をこの世にとどめ置くことはできないのです。自分も他人も、お浄土に遅れて往くか先に往くか、ただその違いだけなのです。その時間の前後のことを考えてみても分かるものではありませんし、たとえその時間が長いとしても夢や幻程度のもので、どれほどの月日ではありますまい。ですから、私もあなたも阿弥陀さまの同じお浄土へ往生してそこで会おうのだということをよくよく心得て、蓮の台でこの娑婆世界での憂いを晴らし、それまでの因縁について語り合い、また娑婆世界に還つて共に助け合い、人々を教え導くことこそが一番大切なのです。

戦後七十周年を迎えて——同じ仏の国に参りあいて——

今年、平成二十七年は、昭和二十年八月十五日の終戦の詔勅から七十周年にあたり、浄土宗の総大本山はもとより多くの宗教施設で戦没者追悼法要が厳修され、全国各地で平和祈念事業が開催されています。第二次世界大戦において、全世界では八五〇〇万人という夥^{おほ}しい数の尊い人命が犠牲となり、わが国だけでも、遠い戦地や本土の空襲によって三一〇万人もの方々の命が失われました。

私の父は、中学二年生だった昭和十九年から終戦までの約一年半、東京都大田区仲六郷の京浜急行雑色駅近くにあった高射砲の製造工場に動員され、それこそ〈月月火水木金金〉で休みなく働いたそうです。そんな中、昭和十九年七月には祖父の次男が、昭和二十年一月には祖父の三男が、共に二十歳の若さで胸を患って亡くなりました。追い打ちをかけるように、昭和二十年四月十五日には、横浜市鶴見区一帯の空襲により、堂宇は悉く灰燼に帰しました。最後までで本堂に残った祖父は仏像や経典、過去帳などを運び出し、家族四人で迫り来る業火と戦いつつ、父は本尊阿弥陀如来像を背負い、皆で手分けして観音・勢至両菩薩像、子育て蔵像の頭部、善導・法然両大師像などを胸に抱えて命からがら避難したそうです。

私の母は、東京都新宿区にあった淀橋第六国民学校の二年生だった昭和十九

年夏から終戦まで、両親と離れ、四歳年上の長姉と共に群馬県安中市板鼻の曹洞宗長伝寺に学童疎開しました。翌年、中学生に上がった長姉は東京に戻り、母は一人残されて過ごしたそうです。祖母から渡された胃腸薬「わかもと」をかじり、菌磨き粉をなめて空腹を凌いだそうですが、少し甘みのあるそれらはとても美味しく、お腹を壊すようなことなどまったく心配はしなかったそうです。戦争を体験してこられた方々によるこうした^{かんなんしんく}艱難辛苦は戦後生まれの私達には、心底それを共有することなどできませんし、だからこそ、そうした方々の平和を求める願いは真に迫るものがあるのでしょう。

今年、自坊のお檀家さんで新盆を迎えられた方の中に九十九歳で旅立たれたおばあちゃん、Fさんがおられました。Fさんを埋葬したお墓の側面には、

戒名

故陸軍上等兵K

昭和二十年一月五日

ニューギニアマノクワリニテ戦死ス 時二行年三十才

と、Fさんのご主人Kさんの最期の場面が刻まれています。インドネシアのニューギニア島西端にあるマノクワリは、第二次世界大戦中、日本海軍の艦船が多く寄港し、第二軍司令部が置かれていました。ニューギニア戦線で日本軍は、連合軍の優勢な戦力の前に次第に制海権・制空権を失って補給路を絶たれてし

まい、飢餓や過酷な自然環境にも苦しみながら、終戦の日まで戦闘を繰り広げました。その結果、ニューギニアに上陸した二十万人もの日本軍将兵は、わずか二万人が生還したに過ぎなかったのです。

昭和十九年十一月、当時二十九歳で赤紙（召集令状）を受け取ったKさんは、一つ年下の妻Fさんと国民学校一年生の長男を残して南方に出征したそうです。戦況が芳しく^なないことは、ほとんどの国民が薄々感じていたことから、出征にあたってKさんも髪の毛と爪を遺品としてFさんに託し、今もKさんの骨壺にはその髪の毛と爪だけが納められています。今年一月三日に旅立たれたFさんは、それこそ七十年もの間、Kさんの供養に努め、そのお守りを念じつつ、菌を食いしばって一人息子を育てて来られました。今頃Fさんは、冒頭の法然上人のご法語通り、先立たれたKさんとお浄土で再会し、七十年間に及ぶたくさん^{さん}の思い出話の一つ一つをゆっくりと語り合っておられることでしょう。

戦後七十周年を迎えた今年、戦争を通じて筆舌に尽くせぬ辛い経験をされ、あるいは、志し半ばで命を落とされた方々の尊い努力や犠牲の上に今の平和な世の中があることに心から感謝すると共に、お念仏の教えの尊さを一人々々の胸に改めて刻み込むことが私たちの務めとなるのでしょうか。

合掌

（林田康順）

東日本

大震災被災地を訪れて ⑤ のを

成田淳教

東京世田谷感応寺住職
関東ブロック浄土宗青年会理事長



復興された現在の照徳寺。

東日本大震災から四年半が経過しました。今回は、被災直後からお手伝いさせて頂いている仙台市宮城野区照徳寺様の現状をお知らせ致します。

照徳寺様は海から約1km入った場所にあり、震災直後の津波で境内全域に海砂や流失物、そしてヘドロが押し寄せ、墓地の墓石の殆どが倒壊し、一部残った本堂と庫裏もそうした海砂などが流れ込み、全壊に近い状態になりました。その後、浄土宗関係の支援や多くのボランティアに支えられ、ようやく本堂の再建にこぎつけ、この七月四日によりやく本尊様が安置されました。

県道亘理塩釜線の手側にある照徳寺一帯は、この県道亘理塩釜線を境にして、手側を災害危険区域、内陸側を居住可能な地域と分ける予定でしたから、災害危険区域になるはずでしたが、町会役員の方々の強い働きかけなどで県道を変更、道路が照徳寺一帯の手側を通ることになりました。そして、このたび塩釜



今年7月4日よりやく戻ったご本尊。

線を6mかさ上げし、かつ、海沿いに建設中の防波堤と共に今後の津波に備えるということで、居住可能な地域になったのです。

しかし、居住可能になったものの建築制限により、新築の場合は2mのかさ上げが義務付けられていますし、何より災害危険区域であれば国の防災促進事業により様々な助成を受けられ移転し易かったのですが、居住可能地区になった事により、助成が下りなくなり、移転したくても移転できない方も出てきているということです。

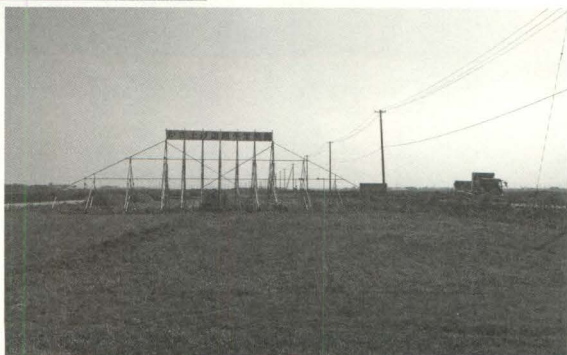
もともと照徳寺一帯には一四〇世帯あった

そうですが、そのうち高齢者の四〇世帯弱の方々が元の場所に戻ってこられました。しかし、若い方々の二十世帯は四、五km離れた土地に移り住んだそうです。そこで、照徳寺様はできるだけ早くこの若い世代の方々が移った場所に土地を取得し別院を建設し、従来の場所と新しい場所の双方で同じように教化ができるように計画しています。ちなみに、若い方々の移転先の土地は、津波も来なかった場所でもととは畑だったそうですが、地権者が仙台市に被災者の方々の為に利用して欲しいと申し出て、住宅地となった所だそうです。

照徳寺一帯の元の場所に戻った四十世帯の方々は高齢の方ばかりですから、夜になると人通りも少なく、コミュニティーも復活せず寂しい様子とのことです。そして、若い世代の人口が減ったことで地域の治安も悪化し、頻繁に賽銭泥棒も入るといことです。一方、移転した若い世代の二十世帯の方々は、他の



かさ上げされた住宅



亘理塩釜線のかさ上げを示す原寸模型看板

地域から移ってきた方々ともコミュニティを作りつつ、子供たちの未来を見据えながら新しい生活をしっかりとはじめられているとのことでした。

こうしたことから別院建設を決めた照徳寺様ですが、檀信徒の約四〇世帯の方々は、まだ仮設住宅や災害公営住宅に住まわれていますし、県外に転出された方もいます。それ以外のお檀家様も被災されている状況ですから、檀信徒に寄付を呼びかけることができません。そこで「照徳寺東日本大震災復興基金」を立ち上げ、全国のご縁のあるご寺院や、被災されなかった内陸部の檀信徒からの寄付で建設資金を賄おうとしています。未だ計画の用途はつかず、難しい状況が続いています。

いずれにしても現在、被災寺院の復興は個々の寺院がそれぞれの方法で、ご住職や副住職、寺族の方々が努力している状況です。

隣の荒浜地区にある浄土寺様は災害危険区域のままなので移転せざるを得ない状況ですが、個人の住居ではない宗教法人施設には助成が下りず、こちらも苦勞されています。

このように被災寺院がそれぞれの形で復興に向けて具体的に動き続けている中で、全国のご縁のある個人やご寺院の更なる支援がまだまだ必要です。他の地方で今後起こりうる大規模災害に備える意味でも、できうる限り早い段階で東日本大震災からの復興をするこ

とが大切であると考えます。

なりた じゅんきょう 東京教区玉川組 感応寺住職

昭和50年1月、世田谷大吉寺に生れる。平成13年より感応寺住職

平成22年浄土宗東京教区青年会会長。平成24年東京浄土災害対策委員

平成26年関東ブロック浄土宗青年会理事長（現職）



小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第六十一回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

いざ、博士号取得へ5



“無妻主義”で ヴァレザーと意気投合

ロイマンから気鋭の仏教学者だと紹介されたマックス・ヴァレザーに対して、当初は傲岸不遜で鼻持ちならないやつだと強い反発すらおぼえた渡辺海旭だったが、ロイマンの勧めもあって、某日、隣町ケールにヴァレザーが寄宿する小洒落たホテルを訪ね、酒を酌み交わすうちに、一氣にうちとけた。

海旭の胸中に蟠っていた反発をたちどころに解いてくれたものは、アルザス名産の白ワインだけではなかった。やがて二人だけの酒宴がたけなわに及ぶと、ヴァレザーは酔眼に笑みをたたえて話題をいきなり変えた。

「ところでワタナベ、ロイマン先生の奥方がいっておったが、なんでも君は女性軍に受けがいいというではないか。それで、博士号をとるのも帰国も遅れているのではないかね」

海旭は^{おおきう}大仰に頭を振ると、即座に言葉を返

した。「とんでもない。貴兄が想像するような、そんなお付き合いはしておらぬ」海旭はワインの盃を一氣に飲み干し一息入れると、得度して以来、生涯の導師として常に目標にしていた「八宗の泰斗」福田行誠のことを胸中に思い描きながら、語気を強めた。「私は生涯妻はめとりません。究めなければならぬ哲理の奥深さを考えると、私にそんな余裕はありません」

ヴァレザーは部屋に木霊^{こだま}するような大きな笑い声を上げた。「そんな真面目な答えを期待していたわけではないのに、こいつは驚いた。面白いやつだ、氣に入った」と手をさしのべて握手を求めてきた。「君とは大いに氣があいそうだ。実は僕もそうなのだよ」ヴァレザーも盃を飲み干すと、一息入れ、大学図書館か研究室のような蔵書の山を見渡して続けた。

「これが僕の生涯の妻だ」

海旭も口にくそ出さなかったが、この男と

は大いに気があいそうだと心中でつぶやいた。

夜も更けて、ようやく互いの研究分野に話が進み、ヴァレザーの現在の関心事は大乗仏教の哲理の根本を究めることにあり、そのために龍樹の『中論』のドイツ語訳に取り掛かるつもりであると語った。

『中論』とは、2世紀にインドに生まれた仏教僧・龍樹（ナーガールジュナ）がまとめたもので、釈迦の死後、法理の俗流解釈が流布するなか、それらに対して釈迦の本義に反していると論駁（ろんぱく）することを通じて、大乗仏教の根本を説いたものである。海旭も十五歳で得度して以来、「座右の聖典」の一つにしていた。読み返す度に理解も深まるが疑義もまた湧くという難解な書でもあった。それをドイツ語に翻訳するとは快挙というか暴挙というか……と内心で驚いているところへ、ヴァレザーは「ついでに君に……」と彼には珍しく言いかけて口を濁した。

海旭はその先を確かめようとしたが、ヴァレザーは手をふってアルザスワインの最後の一杯をおおると言った。「なんだ、ロイマン先生から何も聞いておらんのか。明日にでも確かめてくれ」

海旭は、何やら狐につままれた思いを残しながら再会を約してヴァレザーの宿を辞した。

「義を見てせざるは」で
『中論』の独語訳を手伝う

翌日、海旭はさっそくロイマン教授の研究室を訪って、昨夜、ヴァレザーと意気投合したことを報告し、ヴァレザーから依頼があるらしいがそれは何かと訊ねた。大いに喜んで答えてくれると思ったのに、ロイマンは眉根を曇らせた。しばらく考え込んでから、怪訝（けげん）な面持ちの海旭へおもむろに口を開いた。

「私としてはどうしようかと悩んでいておつたのだ。実をいうと、むしろ君たちが仲たがいをしてくれたほうがいいとさえ思っ

アレザーの寄宿先を訪ねることを勧めたのだ」と言つて海旭を驚かせてから、複雑な胸の内を次のように説明した。

ヴァレザーの師匠筋にあたる印度学のさる泰斗を通じて依頼があつた。ヴァレザーは仏教哲学の体系化を目論んで、その基礎的文獻として『中論』の独語訳に目下取り組んでおり鳩摩羅什の漢訳注釈本と比定したいのだが、漢語に自信がない、ロイマンの元には漢訳仏典が読める日本人留學生がいると聞いたので、手伝つてもらえないだろうか、と。しかし、ロイマンとしては、愛弟子の海旭に「早く博士論文にかかれ」と促している手前できれば断りたい、さりとて大切な学界の人間関係に齟齬^{そご}はきたしたくないと悩んでいたらしい。「ロイマン先生」と海旭は身を乗り出して言つた。「私でお役に立つのなら引き受けても構いません。ヴァレザーはなかなかの人物で志も高いですし——」

「いやいや、これは安請け合いのできる仕事

ではないぞ、ワタナベ」とロイマンは釘を刺した。「君は留学して七年、会話には不自由はなくなつたが、ドイツ語は所詮第二外国語にすぎない。いっぽう『中論』は大乗仏教の聖典中の聖典とされ、叙述の仕方も独特で難解だ。あまたある注釈本を手がかりにするしかない。私だつてドイツ語に訳す自信はない」

海旭は教授の話を遮るように割つて入つた。

「であれば、なおさらヴァレザーのその意気やよし、です。先生、ぜひ手伝わせてください。博士論文は場合によつては一年先に延ばしても構いませんから」

ロイマンは目をむいて言葉を荒らげた。

「何を言うか」

慌てて海旭は言い直した。「いや、博士論文も同時並行で進めますし、これも仏縁ですから」

傲岸^{ごうがん}不遜^{ふそん}は見かけだけで自らの頼み事には躊躇する、そんなヴァレザーのナイーブな振舞いがどこか愛おしかった。最後は「仏縁」

を持ち出したが、実は海旭の深奥に住み続けている義侠心が首をもたげたのである。これまでもロシアの亡命革命党員のための義捐金集めなどに奔走してきたが、それに通じるものだった。

海旭の申し入れを教授は渋々ながら納得した。

「短髪瘦軀の東洋人学僧」と 「蓬髪顎鬚の碧眼仏教学者」

それから旬日を経ず、海旭とヴァレザーの二人は、ロイマン教授の勧めで、ストラスブルク大学の教授の研究室で机を並べるようになった。当人たちはいたって自然体なのだが、門外漢にとつてなんとも奇妙な光景だった。大きな机の上にはサンスクリット、チベット、パリ、漢語などの判じ文字の古文書が山のよう積みまれ、片や短髪瘦軀で浅黒い東洋人、こなた蓬髪で顎鬚を蓄えた碧眼の巨漢が相向き合い、しばらくは古文書と静かに格闘して

いたかと思うと、やおら片方が意味不明の言葉を発し、こなたがたまにドイツ語まじりでそれに答える。この丁々発止がしばらく続くと、再び二人は古文書へと戻る。さらに西洋人たちの好奇心をかきたてのは、黒光りする女性と思しき東洋の神像が机の上で二人を見守るように鎮座していることだった。これが大学周辺ではわかに話題になり、他学部の学生はもちろん教員たちまでもが「見物」にやってきて、噂はますます広まっていた。

こうして海旭は、ヴァレザーによる『中論』のドイツ語訳に付き添い、博士論文は事実上一時休止となった。

半ば「仏縁」、半ば「義侠心」で引き受けた海旭だったが、当初不安がなかったといったらウソになる。ほとんど全文にわたってゼロからの訳し直しになるのではないか、その結果、同定作業はへたをしたら一年、早くても半年はかかると覚悟していた。それどころか「翻訳不能」の多さに翻訳自体がご破算に

なる危惧すらあった。というのも、ヴァレザーはいくら印度学の気鋭とはいっても、仏教に帰依しているわけではない。仏教者の感性をもちあわせてもいらないだろう。所詮彼は西欧哲学の出である。現象を細かく分析していけば自ずと「正解」が得られるとする彼らの論理構造（ロジック）に、『中論』のような深遠なる超論理（メタロジック）は通じるだろうか。さらにはドイツ語という言語にそれを伝達できる機能と能力があるのだろうか、と。

たとえば、『中論』の冒頭にある「八不中道」はどうか。「不生・不滅・不斷・不常・不一・不異・不來・不去」を八不といひ物事すべての在り様を意味し、その上で、物事すべては「相互依存」の關係にあり、それ自体で自立した存在はないという「縁起の道理」を説いたものだが、これをヴァレザーが理解し、彼のドイツ語訳に正しく反映されるだろうか？

しかし、そんな海旭の不安や危惧は杞憂であつた。教授の研究室で比定作業を始めた初日に、この『中論』の根本原理をヴァレザーに問い掛けたところ、「すべてのものは空。神や世界、そして私というものすら実在することは無い」と即座に答えが返ってきた。海旭は驚きを覚えながらも、ヴァレザーの『中論』への深い関わりを知って得心がいった。すでに彼は、サンスクリット、チベット語による『中論』解釈本をほぼ読破しており、同書の本義については十分に理解をしていたのである。また、細かい隘路あひろに分け入るばかりの西欧哲学界の中にあつては柔軟な新カント派の旗手クーノ・フィッシャーや、その新カント派に影響を与えたエドゥアルト・フォン・ハルトマンといった碩学に私淑して哲学的素養を身につけ、ヴェーダなど仏教文学にも親しんだという素養のおかげでもあつた。

（つづく）

浄土誌上句会



●古

〔特選〕古着屋の大き目玉の鯉のぼり

長谷川 裕

古着屋というから古着専門に違いないのだが、たまにはほかの物も舞い込んでくるのだろう。「大き目玉」が大きく立派な鯉のぼりであることを示し、かつては大家だった所から流れて来たことを示している。

〔佳作〕町内の古老きりりと祭足袋

内藤 隼人

鎌倉の古道列なす濃紫陽花

遠井 紀彰

古民家に移りて宵の端居かな

井村 善也

●庭

〔特選〕真似ごとの庭師我流の松手入れ

石原 新

庭の松は庭師が入っていて、見事な枝ぶりを示しているのだが、今自分が手入れをしている。もちろん我流である。さてどのような

出来映えだろ。取り返しのつかない枝ぶりにならなければよいのだが。

〈佳作〉

石庭の波の静けさ夏の闇

齊田 仁

春まひる鉄の匂いの庭ばさみ

長谷川 裕

あじさいの少し疲れし海女の庭

増田 信子

●自由題

〈特選〉

今そこに置かれしごとく実梅落つ

吉崎美和子

梅の実はまだ青いうちにもぐ。梅干しにしたり焼酎漬けにしたりする。この句のは葉の陰にあつて見落とされたのだらう。「置かれしごとく」はよく分かる。そのままよく熟れて、生きものの餌になるのだ。

〈佳作〉

完熟の苺を提げて駅を出る

鈴木麻里子

雑巾の並び干されて遍路宿

富永 陽子

永き日の猫が爪研ぐ納屋柱

山口 信子



誌上句会〈編集部選〉

■古

町中の北向地蔵梅雨古道
月天心世は移りゆく古時計
吊るされて若葉の匂う古着かな
古池を少し凹ませ椿落つ
花あやめ洋館という古き昼
アネモネや古きピアノの見える窓
古本に誰かの朱線昭和の日
古き友遠くにありて梅雨に入る

■庭

狭庭にも文字摺の花背比べ
無口なる庭師の夫婦汗光る

當間あさ子
佐藤雅子
月島恭子
斉田 仁
小林苑を
鳥羽 梓
小林暢雄
吉崎美和子

浄土誌上句会の お知らせ

兼題

締切・二〇一五年九月二十日
発表・『浄土』二〇一五年十一月号
選者・増田河郎子(『南風』主宰)
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

もう夏の匂いの庭におばあさんはつなつの庭にいつもの黒い猫
あじさいの少し疲れし海女の庭
庭木戸を自在に潜る夏の蝶
春昼の庭に土蔵が口ひらく
庭師から日傘ほめられつつ歩く
中庭の藤ゆさゆさと彫塑館
葉桜の庭園墓地にわれらのみ

■自由題

背戸あけて飄々の風もてなしぬ
野良猫に坊守の愛美しや
童心に還りて眺む遠花火
遅き日の雲吞きつと春の季語
黒き帆の一艇戻らざる西日
打楽器としてのわが腹巴旦杏
ベランダに錆びて筋トレ用具かな
全席に氷菓配られ宴果つ
どう見ても脱力したる古浴衣

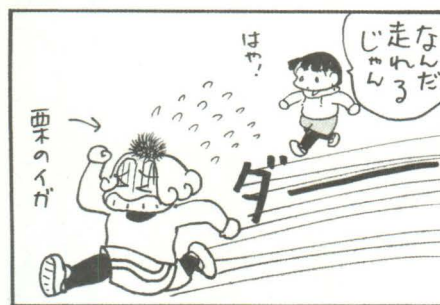
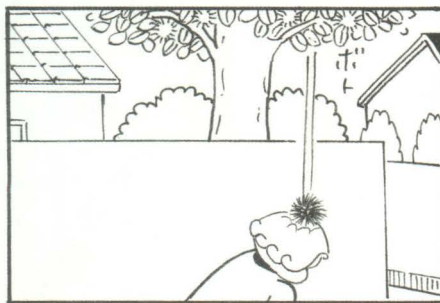
小林苑を
井口 葉
増田信子
浜口佳春
白戸 亮
安東まりあ
谷中友里江
岩井友香
當間あさ子
飯島英徳
佐藤雅子
新島 愛
進藤 透
梅木紀之
相田 保
南 由紀子
三澤明宏

123

かい目

さっちゃんね

かまち♡よしろう



編集後記

秋風にむなしさただよう議事堂前 岱潤

終戦記念日の天皇陛下のお言葉をお聴きしたとき、前日に発表された首相の談話に感じなかった、ご自身の心からの思いが強く響いたのは、私一人ではなかったでしょう。「さきの大戦に対する深い反省と共に、今後、戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い」のお言葉は、同じような文言を首相が語ったとしても、それは今までの行動や、発言からうそ臭く感じられるのはどうすることも出来ないからです。

現在の明仁天皇のメッセージを集めた『戦争をしない国』という本がこの七月

にできました。この本の中で、明仁天皇は皇后陛下と共に、声なき人々の苦しみに寄りそうことをその心の根幹にされ、真直で心に響く言葉を数多く発せられていることを、私も初めて知りました。特に沖縄には強く関心を持たれ、十回も訪問されて、沖縄の人々に寄り添ったすどいお言葉を述べられ、返答する相手が困ったことも多かったようです。そして東日本大震災を始め多くの災害に遭われた人々に常に寄りそい、そのたび毎に一番苦しんでいる方々を思ってお言葉が多いことに驚きさえ覚えました。即位式の時の「皇位を継承するに当たり、皆さんと共に日本国憲法を守り」の御宣言は、

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安樂寺)
麻谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

誰よりも天皇陛下ご自身が立憲主義者であることを表明しています。戦後七十年この国が守ってきた「平和と民主主義」が変わりませんように。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤寛道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十一巻九月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十七年八月二十日

発行 平成二十七年九月一日

発行人

佐藤良純

編集人

大室了皓

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七
FAX 〇三(三三七八)六三三六
振替 〇〇二八・八・八二八七



仏教歳時記

秋彼岸

戦後制定された『国民の祝日に関する法律』の第二条に、「秋分の日 先祖をうやまい、なくなった人々をしのぶ」とある。

子供、高齢者、そして先祖を敬う祝日を、それぞれこの国は制定している。

法律に書かれているからではなく、遙か昔より私たちは春と秋の季候のいいこの時期にお墓参りを行ってきた歴史が、法律となったのであろう。

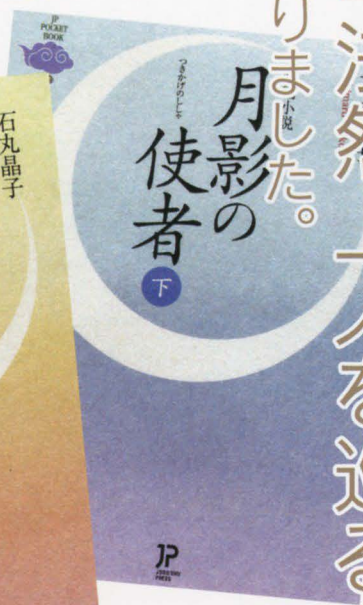
何よりも祝日である、春分・秋分の日は、1年で2日だけ太陽が真東から上がり、真西に沈む。だからこそ太陽の沈むところを凝視し、ご先祖のいらっしゃる西方極楽浄土の方角を定め、合掌し、念仏をして頭を垂れた。

一週間のお彼岸のその起源は聖徳太子とも言われるほど古い。このご先祖を偲べる日を中心にして、前3日、あと3日を仏教の修行週間としたのが、お彼岸である。

秋彼岸酔へとも訓へ堪へもする 中村草田男



ほとけの
慈悲は
いつの世にも
誰のもとにも



石丸晶子先生の
本誌連載小説『法然上人を巡る人々』が
文庫本となりました。

法然。その光に出逢い、闇をこえ、
“あたらしいのち”に生きた
貴族、武士、庶民たちの物語

月影の使者 上下

●浄土宗出版 上下巻とも本体730円＋税

【問合せ・お求め】 浄土宗出版

〒105-0011東京都港区芝公園4-7-4

TEL: 03-3436-3700 FAX: 03-5472-4878 <http://press.jodo.or.jp/>